

2. 「上林地域の胸縄式・豊後型負子について」

資料課長 横出洋二

1 南山城地域と負子

負子は人力運搬の背負い運搬具の一つである。全国的に使用され、戦前から日本の東西差による違いが明確な民具の一つとして注目され、調査研究が進められてきた。

東西差の違いが顕著に見られるのが荷を支える爪の有無で、無爪の負子は東日本、有爪のそれは西日本に分布する。戦前負子を研究した磯貝勇氏¹⁾がその分布を紹介し、戦後文化庁の全国的な緊急民俗調査により詳細な負子の分布状況が確認され、無爪、有爪の東西差分布が明らかになった²⁾。

文化庁の分布図では、南山城及び周辺地域では負子が宇治田原町1カ所を除き記されておらず、全国的に見て負子の空白地帯になっている。実際、京都府立山城郷土資料館を含め南山城地域の博物館施設、学校等には負子は収蔵されておらず、聞き取りや調査報告からこの地域的人力運搬は天秤棒による肩担い運搬であったことが考えられる³⁾。同地域において負子は伝播及び使用されなかったことが推察されるが、当地域的人力運搬具については機会をあらためて報告したい。

今回は『丹後郷土資料館調査だより』第5号⁴⁾で報告した綾部市口上林郷土資料室所蔵の無爪胸縄式負子の追加情報と、あらたに見つかった豊後型有爪負子について紹介し、京都府の人力運搬研究の一助としたい。

2 口上林胸縄式負子

負子の背負い方式は、2本の背負縄でランドセル式に背負う肩縄式と、1本の負縄を頭からかぶり、胸元で左右の縦木の下部に括った2本の補助負縄を掛けて結び固定する胸縄

式とがある。縄だけを使って背負う負縄運搬においても両形式がある。胸縄式は肩縄式に比べ一般的ではなく、また地域的にも北陸から東北地方に多く、東日本に偏っている。京都府においては口上林郷土資料室に1点あるのが唯一の胸縄式負子で、前著で最も西で確認されたものであると紹介したが、旧所蔵者が不明であったので資料としての位置付けは不十分であった。しかし今回旧所蔵者の情報を得て、聞き取りを行い伝播が判明したので追加報告したい。

旧所蔵者は綾部市武吉町在住の岩波信子氏(昭和24生)で、負子は平成22年頃、福井県丹生郡越前町梨ヶ平地区にある実家から持ってきたということである。実家で家財を整理しているときに見つけ、口上林郷土資料室に負子が展示してあるので、当負子も参考になるのではと考え資料室に寄贈された。実家で何の運搬に使用したのか記憶はないが、梨ヶ平は水仙の産地で、収穫した水仙を大人が背負って運んでいた記憶はあるとのことであった⁵⁾(2017.1.29)。

前著で予想したのと違い比較的新しい伝播であり、上林では使用されていないため生業や婚姻圏等上林の地域的関連性を語る資料とはいえない。しかし全国的な負子研究におい



写真1 口上林郷土資料室所蔵胸縄式負子

所 蔵 者	名 称 (片仮名地方名)	収 集 地	備 考
福井県立若狭歴史博物館	鳥居型三棧胸縄式セイタ	小浜市田島	
敦賀市博物館	井桁型三棧胸縄式負子	敦賀市蓬萊町	使用地は越前町城谷
福井市文化財保護センター	井桁型三棧胸縄式負子	あわら市前谷	
福井市文化財保護センター	井桁型三棧胸縄式負子	福井市安波賀町	
福井市文化財保護センター	鳥居型三棧胸縄式負子	福井市湊町	
福井市おさごえ民家園	鳥居型三棧胸縄式カツギバシゴ	福井市浄教寺町	
香川県高松市個人蔵	鳥居型三棧胸縄式セタ	越前町上戸	
口上林郷土資料室	鳥居型三棧胸縄式負子	京都府綾部市武吉	使用地は越前町梨ヶ平

表 福井県の胸縄式負子(全資料無爪・片仮名地方名)

ては使用地が福井県という点は注目される。

管見の限りではあるが、福井県嶺北地方には比較的胸縄式負子の事例が多く見られ(表)、越前町からの伝播という点では胸縄式の分布的状况をさらに補完する資料といえる。

3 古屋の有爪豊後型負子

次の負子は上林郷の北、一般に奥上林と呼ばれる地域に位置する古屋地区の負子である。古屋は若狭へ抜ける府道1号小浜綾部線から南西に6kmほど入った谷奥の山間地である。負子の聞き取り調査(2016.9.12)の中で有爪四棧豊後型負子が見つかった。

所蔵者は古屋の細井恵美子家で、縦木が内湾しており、爪の位置も高い豊後型の特徴をしている。大きさは、縦木高さ115cm、爪の長さ26cmで、縦木の下から31cmの高さに爪をホゾ穴に挿して固定してある。縦木上部幅が13cm、下部が41cmで、上下の開き差が大きい豊後型のもう一つの特徴を持っている。全国一般的な負子は東西関係なく縦木は平行かそれに近い開きの少ない「ハの字」である(写真1)。緩衝材は東日本に多い横巻縄(同)ではなく、西日本で一般的な藁輪など付属の緩衝材を取り付けて使用するタイプである。

昭和5年生の細井さんと、大正15年生の渡辺フジコさんによると、古屋ではオイコと呼び、子供の頃からあり、集落どこの家でもこの形だったという。主にフロヤカマドで使

うタキモンオイ(薪の運搬)に使っていたという。オトコ用とオナゴ用があり、オナゴ用は短いという。

薪は、春に山で刈って積んで置き、冬の前に運んだ。運搬具として、他にオイソ(2本負縄)も使った。オイソはスミモチ(炭俵運搬)やタキモンのシバやタケを運ぶのに使った。

山は共同山で、カシ・クヌギ・ナラなどが生えているジョウキヤマ(上木山)では、家ごとに区分けして秋から田仕事が始まる前の3月末まで炭を焼いた。真冬の降雪時にはオトコはゾウリ・ワラジ・オイソを編んだ。

さて、豊後型オイコの伝播は織野英史氏の研究で、大分県のナバシ(椎茸栽培職人)が大正から昭和戦前期に県外に出かけて椎茸栽培したことや、大分県に栽培技術を習って帰った人によって中・四国に伝播したことを明らかにされている⁶⁾。しかし古屋のお二人は、昔からこの形態のオイコで、椎茸栽培職人が来たということは知らないということである。

古屋のオイコは形態的に上林地域で独自に発生したとは考えられず、近代のある時期に古屋の人が西日本に出かけた機会などで導入されたのではないだろうか。また豊後型のルーツは形態的によく似た朝鮮半島のチゲと⁷⁾考えられている。話者によると炭焼きに朝鮮半島の人も来ていたことがあるとのことで、所持していた朝鮮のチゲを見て工夫した可能性がある。

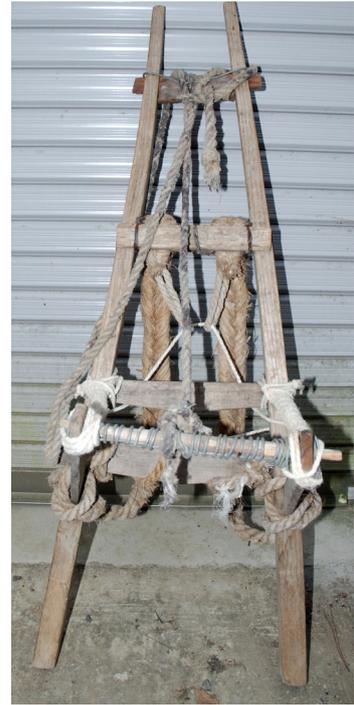


写真2 細井家所蔵豊後型オイコ

おわりに

綾部市の北に隣接する丹後地域は無爪肩縄式のセイタ(負子)が濃密に分布する地域である。南に隣接する丹波北部は無爪肩縄式と有爪肩縄式とが混在する地域である。その丹波北部に位置し、若狭と接する綾部市上林郷には、九州東部の地域的特徴を有する豊後型と北陸・東北で特徴的に見られる胸縄式が共に存在している。胸縄式は近年上林に持ち込まれたもので地域的特徴を示すものではないが、両負子は、さまざまな負子が混在する丹波の地域性を考えさせられる資料である。



写真3 綾部市古屋

註

- 1) 磯貝勇「背負い梯子—背負い運搬とその用具—」『日本の民具』岩崎美術社 1971
- 2) 文化庁編『日本民俗地図IV 交易・運搬』財団法人国土地理協会 1974
- 3) 『南山城村史』資料編 南山城村 2002 笠置町飛鳥路の仲西弘氏(大正7)もオウコ(天秤棒)を使用してシバを運んだという。オウコにはシバ束を縦にして前後2束ずつ担ぎ(ヨンテンカタギ)、船積みの浜まで運んだ。二人で1本の長いオウコで8シバ(束)担ぐ場合もあった。(2017.1.8)
- 4) 京都府立丹後郷土資料館 2016
- 5) 負子を使用したかは不明。休憩のと運搬物の支えに杖を使っていた記憶があるので、負子の使用が考えられる。
- 6) 織野英史『背負い梯子の研究』慶友社 1999
- 7) 註6)

※(年月日)は調査日